

初期ストア派の倫理学における「自然本性」の概念

中川 純男

1.

最初期ストア派について、新たな知見をえようとするなら、アルニムがその資料集に反映することのなかった視点をとらなければならない。そのような視点はいくつかあるが、そのひとつは証言を伝える資料の文脈に注目することである。アルニムは資料の文脈を無視し、主題ごとの証言に分断している。そのため、ひとつひとつの証言がもともとどのような文脈のなかにあったのかは、資料集からはわからない。最初期ストア派についての主たる資料はディオゲネス・ラエルティオスとストバイオスである。これらの資料の伝える証言とその源泉は錯綜しており、その資料的価値をただしく評価することは容易ではない。さまざまな資料の証言を同一の主題ごとに比較することは、証言の伝承経路と信憑性を批判的に評価するために、必要な作業である。しかしながら、初期ストア派の思想を伝えるこれらの資料は、他の文脈のなかでたまたまストア派の思想に言及しているのではない。それぞれストア派の思想を紹介することを意図しており、そのために構成された文脈をもっている。本論文は、証言資料のもつそのような文脈を考慮することにより、証言そのものの評価を見なおそうとする試みである。以下においてわれわれが比較を試みるのは、ストア派における「目的」の概念についての、ストバイオスとディオゲネス・ラエルティオスとの証言である。「目的」についてどのように説明するかは、ヘレニズム期の哲学にとって、学派を識別する指標ともいえる重要な論点であった。

初期ストア派における「目的」の概念について、ストバイオスは次のようにいう。

目的をゼノンが次のように説明した。「調和しつつ *ὁμολογουμένως* 生きること」と。すなわちひとつの整合的な *σύμφωνον* ロゴスにしたがって生きることであり、争いながら生きているひとは不幸であると考えたのである。ゼノンより後の人々は分節化を進めて、「自然本性と調和しつつ生きること」といった。ゼノンが語ったことは述語が短すぎると考えたからである。すなわちゼノンの学派を最初に引き継いだクレアンテスが「自然本性と」を付け加え、「目的は自然本性と調和しつつ生きることである」と説明した。これをクリュシッポスはさらに明白にしようとして次のようにいった。「自然本性によって起こることがらの経験にしたがって生きることである。」

Stobaeus, *Eclogae*, 2,75,11-76,8 (SVF I,179; 552).

この証言によれば、目的について、最初ゼノンが「調和しつつ生きること」と説明したが、その弟子クレアンテスは、「自然本性と」という語を挿入して、「自然本性と調和しつつ生きること」と改め、さらにクレアンテスの弟子クリュシッポスは同じ主旨の定義を「自然本性によって起こることがらの経験にしたがって生きること」とであると敷衍しつつ言い換えたことになる。ゼノンの説明はその意味を変えずに次第に精密になっていった。ストア派の連続性について、このような理解を背後におきつつ、ストバイオスは、目的についてのストア派の説を紹介している。初期ストア派の資料としてはストバイオスと並んで重要なディオゲネス・ラエルティオスは次のように伝えている。

このような理由でゼノンが『人間の自然本性について』のなかで、はじめて自然本性と調和しつつ生きることが目的であるといったのであり、これは徳にしたがって生きることに他ならない。われわれを徳へと導くのは自然本性だからである。同様のことはクレアンテスも『快について』のなかで、ポセイドニオスも、そしてヘカトンが『目的について』のなかでいっている。また「徳にしたがって生きる」とは、クリュシッポスが『目的について』第一巻でいうところでは「自然本性にしたがって起こることがらの経験にしたがって」というに等しい。われわれの自然本性は万有の自然本性の一部だからである。⁸⁸ だから自然本性にしたがいつつ ἀκολουθῶς 生きるとは目的となるのであり、これは自分の自然本性と万有の自然本性にしたがうことであり、共通の法が禁止していることは何一つ行わないことである。共通の法とはすべてに行きわたる正しいロゴスであり、存在するものすべての支配を司っているゼウスと同一である。各人のダイモンが万物の支配者の意志と一致し、この一致 συμφωνίαν にしたがって行為されるとき、このことが幸福な者の徳であり、生の滞りなさである。

Diogenes Laertius 7, 87-88 (SVF I,179; III,4).

われわれが考えようとしているのは、ゼノンのいう「調和しつつ生きる ὁμολογουμένως ζῆν」ことが何を意味しているのか、ないし何を意味しうるのか、という問いである。ディオゲネス・ラエルティオスにいう、目的についてのゼノンの説明、「自然本性と調和しつつ生きることである」は、きわめて有名であり、ストア派の倫理学を解説するときには、必ず引用されるといってもよい。ところが、ストバイオスの伝える形によれば、目的はたんに「調和しつつ生きること」とあり、しかも「自然本性と」を付け加えたのはクレアンテスであるといわれている。

歴史的にはいずれの証言が正しいのか。ストバイオスか、ディオゲネス・ラエルティオスか。この問題を決定する直接の手がかりは、われわれにはない。しかし、ストア派が「調和しつつ」と訳した語 ὁμολογουμένως によって、何を理解していたかを知らうとすると、⁸⁹ 「自然本性と」が付け加えられている場合と、いない場合との意味の相違を考察するこ

とは、有益であると思われる。

2.

「調和しつつ」*ὁμολογουμένως* という表現を、ゼノンは、「ロゴスと調和しつつ」という意味で用いているとする解釈がある。この解釈によれば、ストア派にとってロゴスと自然本性（ピュシス）とはきわめて近い概念であり、「ロゴスと調和しつつ」といっても、「自然本性と調和しつつ」といっても、実質的な意味の相違はない。したがって、目的を、ゼノンはたんに「調和しつつ生きることである」と説明したというストバイオスの証言は、「自然本性と」を加えたディオゲネス・ラエルティオスの証言と異ならないし、またクレアンテスの説明とも異ならないことになる。このような解釈の創始者はおそらく、M. Pohlenz である⁽¹⁾。Pohlenz 以降は、現在にいたるまで多くの解釈者に採用されている⁽²⁾。この解釈は正しいであろうか。

副詞 *ὁμολογουμένως* は、動詞 *ὁμολογοῦμαι* に由来する。*ὁμολογοῦμαι* の通常用例は、「ロゴスを同じくする」、「同じロゴスを語る」であり、*ὁμολογουμένως* も、通常は「ロゴスを同じくして」という意味で用いられている。たとえば、プラトン『饗宴』では「身体の健康な状態と病気の状態とは *ὁμολογουμένως* に別であり似ていない」といわれている⁽³⁾。ここでの *ὁμολογουμένως* は、「一般に認められているところ、人々の意見の一致しているところ」という意味である。「誰もが認めているように⁽⁴⁾」とか「人々の認めるごとく⁽⁵⁾」などと訳されている。ところが前述の解釈は *ὁμολογουμένως* を「ロゴスと調和しつつ」と解するのであるから、この語の核にある「同じ」と「ロゴス」との関係は、「同じロゴス」ではなく、「ロゴスと同じ」であり、通常の意味とは異なっている。「ロゴスと同じ」という意味は、われわれの知るかぎり、*ὁμολογοῦμαι*, *ὁμολογουμένως* の通常用例にはない。ゼノンは、*ὁμολογουμένως* という語を通常とは異なった仕方を用いていることになる。このような解釈上の難点を和らげるため、Pohlenz は、ゼノンがギリシア語を母国語としなかったと考えられることを指摘する。Pohlenz によれば、*ὁμολογουμένως* の通常の意味は「一致して、調和して」であるが、外国人であるゼノンはこれを「ロゴスと一致して」という意味に理解した。このように説明される。この説明によれば、*ὁμολογουμένως* は、通常、

⁽¹⁾ Pohlenz, M. *Die Stoa: Geschichte einer geistigen Bewegung*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, I. 1948, p.117.

⁽²⁾ Long, A.A. Carneades and the Stoic telos, *Phronesis* 12, 1967, p.61; Long, A.A. & Sedley, D.N. *The Hellenistic philosophers*, vol.2, Cambridge Univ. Pr., 1987, p.390; Steinmetz, P. *Die Stoa in: Grundriss der Geschichte der Philosophie, begründet von F. Ueberweg*, Basel: Schwabe, 1994. *Die Philosophie der Antike*, Band 4 Die Hellenistische Philosophie, Viertes Kapitel, p.541-542 など。

⁽³⁾ Plato, *Symp.*186b5-6 τὸ γὰρ ὑγιές τοῦ σώματος καὶ τὸ νοσοῦν ὁμολογουμένως ἕτερόν τε καὶ ἀνόμοιον ἐστὶ,

⁽⁴⁾ 鈴木照雄訳 p.39、プラトン全集 5、岩波書店、1974.

⁽⁵⁾ 山本光雄訳 p.174、プラトン全集 3、角川書店、1973.

「ロゴス」という意味合いを含まず、たんに「調和しつつ」という意味で用いられているから、ゼノンが「ロゴスと調和しつつ」という意味を読みとったとしても、通常の意味に反するとまではいえないことを暗に主張している。

しかしながら、*ὁμολογουμένως* が、通常の用法では「ロゴス」という意味合いを失っているという説明はにわかには信じがたい。たしかに LSJ によれば、*ὁμολογουμένως* の意味のひとつは「一般に認められているところでは」「人々が一致して認めているように」であるが、もうひとつは ‘conformably with’ という意味であり、この意味がさらに、一般的な意味とストア哲学における意味とに区分されている。一見すると Pohlenz の説明を裏づけているように見えるが、果たしてそうであろうか。‘conformably with’ という意味の非ストア的用例として挙げられているのは二箇所であり、いずれもクセノポンである。

そして、ソクラテス、われわれの議論は *ὁμολογουμένως* に移行しています。役に立つものが財産であるとすでに語られているのですから⁽⁶⁾。Xenophon, *Oeconomicus* 1,11.

「ロゴスは *ὁμολογουμένως* に移行している」とは、新たな論点がすでに述べられたことと整合的であることをいう。したがって、*ὁμολογουμένως* は「ロゴスとロゴスとが調和している、同じである」という意味の用例と見なすことができる。もうひとつは次の箇所である。三嶋輝夫氏は次のように訳している。

さてソクラテスは以上のことを述べ終わると、語られたことにいかにもふさわしく、瞳も、姿勢も、歩みも、燦然と輝くばかりの様子で退場した⁽⁷⁾。

Xenophon, *Apologia Socratis* 27 (邦訳 p.221)

ソクラテスの眼差しや姿勢などがソクラテスの語ったことに「ふさわしい」という意味で、用いられているのであるから、ここでの *ὁμολογουμένως* に「同じロゴス」という意味合いは含まれていないといえよう。LSJ もそのように解釈したものと思われる。もっとも、この箇所の *ὁμολογουμένως* は *εἰπὼν* を修飾していると解釈することもできる。その場合、訳は「このように、すでに語られたことときわめて整合的な仕方語り終わると、」となり、*ὁμολογουμένως* はロゴスとロゴスとの関係を形容していることになる。*ὁμολογουμένως* あるいは、その同系語がロゴスとロゴスとの関係以外に用いられることがないとはいえないが、それは一般的な用法ではないと思われる。しかも、ロゴスというギリシア語のもつ意味の広がり、「勘定、比例、関係、説明」など多様な意味を考慮するなら、異なったもの

⁽⁶⁾ Καὶ ὁμολογουμένως γε, ὦ Σώκρατες, ὁ λόγος ἡμῶν χωρεῖ, ἐπεὶ περ εἴρηται τὰ ὠφελοῦντα χρήματα εἶναι.

⁽⁷⁾ εἰπὼν δε ταῦτα μάλα ὁμολογουμένως δὴ τοῖς εἰρημένους ἀπήει καὶ ὄμμασι καὶ σχήματι καὶ βαδίσει φαιδρός. 三嶋輝夫訳、講談社学術文庫、1998.

の間に成立する「同じ」という関係はすべて、何らかの意味でロゴスの関係であり、そこにはロゴスの一致 *ὁμολογία* が成立していると思なすこともできる。もしゼノンがそれを、「同じロゴス」ではなく、「ロゴスと同じ」という意味で用いたとすれば、通例に反した用語法であると感じられたであろうと推測する方が自然である。

ストバイオスは目的の定義に、*τῇ φύσει* 「自然本性と」という語が追加された事情を説明して、後の人々は「ゼノンが語ったことは述語が短すぎると考えた」ためであるという。これは、後の時代の哲学者はむかしの哲学者の精神を受けつぎつつことばのうえではより詳細になったという形で学派の連続性を認めようとする、学説史家の歴史観にそった証言であろうが、その信憑性を吟味してみなければならない。「後の人々」と複数で語られ、「考えた」*ὑπολαμβάντες* という語が用いられているから、これはクレアンテスやクリュシッポスの著作に見いだされた説明ではなく、学説史家の推測であろう。「短すぎる」*ἐλαττον* という語については、それが「不完全なレクトン」を指しているという指摘がある⁽⁸⁾。たとえば、ディオゲネス・ラエルティオスは不完全な *ἐλλιπής* レクトンとして、「(彼は) 書く『*Γράφει*』」を挙げ、それが不完全であることを説明して、「われわれは、〈誰が〉とさらに問うからである」と説明している⁽⁹⁾。またアンモニオスによればポルピュリオスはストア派の述語論を紹介するなかで、述語以下の *ἐλαττον* 述語、すなわち不完全な述語として、「プラトンが愛する」における「愛する」をあげ、これに「誰を」が付け加えられたなら、「プラトンがディオンを愛する」のように完成した記述になるという⁽¹⁰⁾。それゆえ、「短すぎる」という表現がストア派のいう「不完全なレクトン」を指している可能性は高い。しかしながら、*ὁμολογουμένως* は与格の名詞を伴わなければさらなる問いを誘発するような不完全な表現なのか。この疑問に対しては、*ὁμολογουμένως* の用例に、与格をとまなわぬものが数多く見いだされることを指摘するだけで十分であろう。善とはどのようなものを列挙したクレアンテスの詩でも、*ὁμολογούμενον* という語は、与格をとまなうことなく単独で用いられている。

善はどのようなものかきみがわたしにたずねるのなら、聞くがよい。

秩序あり、正義にかない、聖らかにして

…… (中略) ……

敬うべくして、調和し *ὁμολογούμενον*、***⁽¹¹⁾

Clemens Alexandrinus, *Stromata* 5, 14, 110 (SVF I, 557)

⁽⁸⁾ Pohlenz, M. *Die Stoa*, II Erläuterungen, 1949, p.27-28.

⁽⁹⁾ Diogenes Laertius 7, 63 (SVF II, 181).

⁽¹⁰⁾ Ammonius, *In Aristotelis de Interpretatione Commentarius*, p.44,33-p.45,3. (SVF II, 184).

⁽¹¹⁾ この詩は複数の資料に伝えられ、*ὁμολογούμενον* 前後のテキストには、欠落の推定箇所を含め、異同がある。アルニムは最後の行を「敬うべくして、〈恵みにあふれ、〉調和し」と補っている。

この箇所には、異読がある。しかし *ὁμολογούμενον* が与格をとまなうことなく単独で用いられていたことはほぼ疑いえない。

3.

ストバイオスは、「調和しつつ生きること」を説明して「ひとつの整合的なロゴスにしたがって生きること *καθ' ἓνα λόγον καὶ σύμφωνον ζῆν*」であるといっている。このことも、*ὁμολογουμένως* が「ロゴスと調和しつつ」という意味で用いられていると解釈する論拠とされる。「ロゴスにしたがっている *κατὰ λόγον*」ことは、ロゴスと調和していることと同じであると考えられているのである⁽¹²⁾。ストバイオスが *ὁμολογουμένως* を語る文脈を検討して見よう。*ὁμολογουμένως* の通常の用例は大きく二つに分けることができる。与格をとまなわないときは、実質的に複数のものについて、それらが互いに同じロゴスを語るという意味である。「実質的に複数のもの」といったのは、先に見たクセノポン『家政』にあるように、文法的には単数の *λόγος* を主語とする動詞を修飾しているが、意味のうえでは「先の *λόγος*」と「現在の *λόγος*」との関係が *ὁμολογουμένως* によって表現されている場合もあるからである。これに対し *ὁμολογουμένως* が与格をとまなうときは、その与格で表されたもの（が語るロゴス）と同じロゴスを語るという意味である。ストバイオスは、「調和しつつ生きること *ὁμολογουμένως ζῆν*」を説明して、「すなわちひとつの整合的なロゴスにしたがって生きることであり、争いながら生きているひとは不幸であると考えたのである」と続けていた。この説明はしかし、*ὁμολογουμένως* の意味を確定する手がかりを与えない。*ὁμολογοῦμαι* の主語である複数のものがひとつの共通のロゴスを語ることによって、ひとつの整合的なロゴスにしたがうことであるとも解釈できるし、ロゴス（の語るロゴス）に同調してひとつの整合的なロゴスにしたがうことであるとも解釈できるからである。「争いながら」といわれているが、これも複数のものが異なったロゴスを語ること、すなわち生がその内実においてそのつど互いに相反することなのか、それともひとつの整合的なロゴスと矛盾していることなのか、はっきりしない。目的を説明した箇所の直前の文を見てみよう。

人間はロゴス的で死すべき動物であり、自然本性的にポリス的であるので、彼らは、人間にかかわる徳の全体も幸福も、首尾一貫し *ἀκόλουθον* 自然本性的に調和した生である⁽¹³⁾。
Stobaeus, *Eclogae* 2,75,7-10.

⁽¹²⁾ Long & Sedley, *loc. cit.*

⁽¹³⁾ Stob. *Ecl.* 2,75,7-10 *Τοῦ δὲ ἀνθρώπου ὄντος ζώου λογικοῦ θνητοῦ, φύσει πολιτικοῦ, φασὶ καὶ τὴν ἀρετὴν πᾶσαν τὴν περὶ ἄνθρωπον καὶ τὴν εὐδαιμονίαν ζῶν ἀκόλουθον ὑπάρχειν καὶ ὁμολογουμένην φύσει.*

この箇所が、これに続く箇所における、目的は「調和しつつ生きることであり」という発言とどのように関係しているのかを考えてみよう。「人間はロゴス的で死すべき動物である」とは、人間を他の動物や神々から区別する人間の定義である⁽¹⁴⁾。また人間が「自然本性的にポリス的」であることは、アリストテレスによれば、動物のなかで人間だけがロゴスをもっていることを根拠とする⁽¹⁵⁾。それゆえ、ストバイオスのテキストで強調されているのは、人間が他の動物や神々と異なっていること、とりわけロゴス的であるという点で他の動物と区別されることであると考えられる。とすれば人間の徳や幸福が「首尾一貫し自然本性的に調和した生」であるという発言も、ロゴス的な人間に固有の幸福や徳を説明していると考えなければならない。「首尾一貫し、調和している」ことは自然本性的にロゴス的である人間に固有な幸福であり徳であるといわれていると考えなければならない。

この箇所のテキストは *ὁμολογουμένως φύσει* とあり、副詞 *ὁμολογουμένως* は *φύσις* の与格とともに用いられている。*φύσει* には定冠詞がない。この点での異読は、Wachsmuthの校本には記されていない。定冠詞がないのは、ここでの *φύσει* が「自然本性的に」という意味であって、「自然本性と」調和しているという意味での与格ではないからである。また仮に、これを「自然本性と調和しつつ」と読み換えたとしたら、文脈にあわない。なぜなら、ここでは人間の自然本性は、他の動物や神々の自然本性とは異なっていると主張されているのであり、「自然本性」そのものは、人間、人間以外の動物、神々に共通して用いられる概念であるから、「自然本性」という概念を用いて人間の固有性を主張することはできないからである。この箇所の論理は、骨子をたどれば次のようになる。〈人間はロゴス的である点で他の動物と区別されるのであるから、人間に固有な徳や幸福はロゴス的な人間に固有なものでなければならない。そのように人間に固有な徳や幸福のあり方は、首尾一貫し調和しているというあり方である。〉このような論理の延長上に、次に来る目的の規定をおくなら、*ὁμολογουμένως* は「ロゴス的」という人間の固有性に由来するあり方を表しているのだからなければならない。

ストバイオスと類似した証言が『ルキアノス古注』に見られる⁽¹⁶⁾。ストバイオスと同一の資料を用いていると考えられるが、問題の箇所にかんしてはいくつかの点でストバイオスとは異なっている。訳せば次のようになる。

彼らはまた、全体としての徳は動物であると主張し、人間はロゴス的で死すべき動物であり、自然本性的にポリス的であるから、人間にかかわる徳の全体も幸福も目的も

⁽¹⁴⁾ Sextus Empiricus, *Adv. Math.*, 11, 8 (SVF III, 224).

⁽¹⁵⁾ Arist. *Politica* 1,2,1253a1-18.

⁽¹⁶⁾ *Schol. in Lucian.* 29,22 ἀλλὰ καὶ πᾶσαν ἀρετὴν ζῶόν φασι, ζῶου δὲ τοῦ ἀνθρώπου ὄντος λογικοῦ θνητοῦ φύσει πολιτικοῦ καὶ τὴν ἀρετὴν πᾶσαν τὴν περὶ ἄνθρωπον καὶ τὴν εὐδαιμονίαν καὶ τὸ τέλος λογικὰ εἶναι φασι καὶ τὴν μὲν εὐδαιμονίαν ζωὴν ἀκόλουθον εἶναι καὶ ὁμολογουμένην τῇ φύσει, τὸ δὲ τέλος ὁμολογουμένως ζῆν,...

ロゴス的であり、幸福は首尾一貫し自然本性と調和した生であり、目的も同様に *ὁμολογουμένως* に生きることであると彼らはいい… (以下略) …。

Scholion in Luciani Bis accusatum 22.

ストバイオスと異なる箇所を下線で示した。「……目的もロゴス的であり」の部分は、これを補うことによって始めて、人間はロゴス的動物であるという定義が生きてくるから、ストバイオスでは不注意から脱落したのではないかと疑われる⁽¹⁷⁾。この古注では、人間はロゴス的であるから、人間の徳も幸福も目的もロゴス的であるという論理が主張の核となっている。「自然本性と調和した」という箇所の「自然本性」には、定冠詞が付されているから、「自然本性と調和した」と読むのが自然である。しかし古注は、自然本性的にロゴス的である人間にとっての幸福がロゴス的であることをすでに明言しているから、「自然本性と」調和していることに主張の重点があるのではなく、「調和している」ことがロゴス的人間に固有のあり方であることが強調されているという文意に誤解の余地はない。

次にわれわれは、ディオゲネス・ラエルティオスの文脈に目を向けてみよう。ディオゲネス・ラエルティオスでもまた、目的の規定はその直前の文脈を受けて語られる。先に引用した「このような理由で」という語で始まる箇所の直前では次のようにいわれている。

そして自然本性は、植物の場合も動物の場合も違いはない。というのも彼らの主張では、自然本性は、衝動や感覚を利用することなく植物を支配しているのであり、われわれの場合も、植物と同じような仕方で起こっていることがある。動物の場合は、さらに衝動が付け加わっているから、衝動をあわせ用いつつ自らに親近的なものを目指して歩行するのであり、これらのものにとって「自然本性にしたがう *κατὰ φύσιν*」とは衝動にしたがって *κατὰ τὴν ὄρμην* 支配されることである⁽¹⁸⁾。しかしロゴス的なもの場合には、ロゴスがいつそう完全な指示者として与えられているので、そのようなものにとってはロゴスにしたがって生きることが正しく自然本性にしたがうことになる⁽¹⁹⁾。ロゴスは衝動を形作る技術者として付け加わっているからである。

Diogenes Laertius 7,86 (SVF III, 178).

⁽¹⁷⁾推測されるのは、ストバイオスの写本が伝承される経路で、まずこの箇所が脱落し、そのために意味不明となった文脈を補正するため、一回あるいは複数回の修正が加えられて現在のテキストになったという可能性である。

⁽¹⁸⁾ *τὸ κατὰ τὴν ὄρμην...* と読む。多くの校本がアルニムにしたがって、*τῷ κατὰ τὴν ὄρμην* と読んでいる。「これらのものにとって、自然本性にしたがうとは衝動にしたがったことにより支配されていることである」となる。

⁽¹⁹⁾この箇所はアルニムの修正にしたがって訳したが、*τούτοις* ではなく写本どおり *τοῖς* として「ロゴスにしたがって生きることが、自然本性にかなったことによって正しく実現する」と読むこともできるし、このこと自体はストア派の考えに含まれている。しかし、文脈が不自然となることは免れない。

ディオゲネス・ラエルティオスは、ストア倫理学の説明をクリュシッポスの内在化 *οἰκειῶσις* という思想から始めており、引用した箇所も自然本性はそれ自体で、自らの構造と調和したことを求めるという内容に続く箇所であるから、同じ文脈がゼノンにも適用できるか否かについては慎重でなければならない。しかし、*ὁμολογουμένως* という概念が導入される文脈はストバイオスと共通している。すなわち、ディオゲネス・ラエルティオスによれば、植物も動物も人間も共通の自然本性に支配されている。しかし、動物は、植物のもたない衝動をもっており、衝動にしたがう *κατὰ τὴν ὀρμὴν* という仕方自然本性にしたがう *κατὰ φύσιν*。また人間は他の動物のもたないロゴスをもっており、ロゴスにしたがう *κατὰ λόγον* という仕方自然本性にしたがう。このようにいわれている。「ロゴスにしたがう」は、「自然本性にしたがう」のたんなる言い換えではない。植物や人間以外の動物もまた、自然本性にしたがっている。しかしそれらはロゴスにしたがっているのではない。自然本性にしたがうことがロゴスにしたがうことであるのは、ロゴスの動物に固有の事態である。「自然本性と調和しつつ生きること *ὁμολογουμένως τῇ φύσει ζῆν*」を、このような文脈のなかで理解するなら、それはたんに自然本性にしたがって生きているのではなく、ロゴスの動物に固有な仕方自然本性にしたがって *κατὰ φύσιν* 生きていることでなければならない。

4.

ストバイオス、ディオゲネス・ラエルティオスいずれの証言も、*ὁμολογουμένως* という語で、ロゴスの動物である人間の生の固有性を表現している。では、この語に「自然本性と」が付された証言と、付されていない証言とがあることはどのように説明できるであろうか。たんに調和していることと、自然本性と調和していることとが意味のうえで異なっていることは明白である。たんに「調和した生」といわれるなら、われわれはそこに再帰代名詞を補って「それ自身と調和した生」と解すべきであり、生がそれ自身と調和しているという意味になる。これに対し、「自然本性と調和した生」といわれるとき、その「自然本性」は意味のうえで生とは区別された何かである。

幸福な生、あるいは徳にしたがった生が調和した生であるというのは、多くの証言が指摘しているように、幸福や徳についての、ある意味で伝統的な観念である⁽²⁰⁾。プラトン『法律』の第二巻では、子供の教育について論ずるにあたり、アテナイからの客人は次のように始めている。

わたしが教育 *παιδεία* というのは、子供に最初にそなわる徳のことです。快や嗜好、

⁽²⁰⁾たとえば、Plutarchus, *De communibus notitiis*, 23, 1069E.

苦や嫌悪が、まだロゴスをもちいて捉えることのできないものたちの魂に正しく生ずるなら、そしてロゴスを手に入れたときには、そのロゴスと協調して適切な生活習慣のおかげで正しい習慣を形成するなら、その協調 *συμφωνία* の全体が徳であり、快や苦にかんして正しく涵養された魂の部分、人生のきわめて早い段階から最後にいたるまで嫌悪すべきことを嫌悪し、好むべきものを好むようになった部分を、ロゴスのうえで切り取って、教育と呼ぶなら、正しく名づけたことになるだろうというのがわたしの意見です。

Plato, *Leges* 2, 653B1-C4.

ここで述べられているのは、いわゆる魂の三部分説にも連なる考えである。徳は魂の諸部分の調和であり、ロゴス的な部分の支配によって実現するというプラトンの主張を認めつつ、それがまたストア派のいう *ὁμολογία* でもあるという理解はガレノスやセネカにも見ることができる⁽²¹⁾。このような理解によれば、魂のロゴス的な部分に支配された生は、規定上、ロゴス的であって、首尾一貫しているが⁽²²⁾、反対に、そのつどの快苦に流された生は、一貫性を欠き、矛盾を含んだ生である。このように生をその持続性において捉え、持続する生の内的整合性、首尾一貫性を実現するのが徳であるという理解は、幸福に与えられた「生の滞りなさ」という規定にも現れている。

ディオゲネス・ラエルティオスは、目的を説明した箇所の中で、「各人のダイモンが万物の支配者の意志と調和し、この調和にしたがって *κατὰ τὴν συμφωνίαν* すべてが行為される時、このことが幸福な者の徳であり、生の滞りなさである」といっていた (7, 88)。

「各人のダイモン」とはそのうちにロゴスも含む魂の主導的部分のことである。生は流れ *ῥοία* であるという表現が生持続性に注目した表現であることはいうまでもない。ひとの魂が「万物の支配者の意志と調和し、この調和にしたがってすべてが行為される」といわ

⁽²¹⁾セネカが生整合性を論じた箇所については、Justus Lipsius *Manuductionis ad Stoicam Philosophiam Libri tres*, Lovanii, 1604, repr. Hildesheim: Georg Olms, 2001, Opera omnia 1, dissert. 15-18 に詳しい。ガレノスによれば、クレアンテスは、自然本性と調和することは魂のロゴス的な部分が支配することであると考へたが、クリュシッポスはそれを「自然本性にしたがった第一のこのために、可能なことすべてを行う」という意味に改ざんしてしまったという、ポセイドニオスの批判を紹介している。Galenus, *De placitis Hippocratis et Platonis*, 5, 6, 10, p. 328, De Lacy. またゼノンについてはクレアンテス、クリュシッポスのいずれに近いかわからないが、両者の中間ではないかと推測しているから、ガレノスもゼノンの著作を直接は見えていないのであろう。op. cit. 5, 6, 42, p. 334, De Lacy. ゼノンやクレアンテスが、魂の「三部分説」を受け入れたか否か、また魂の「ロゴス的な部分」という思想をもっていたか否かを決定する証言はない。しかし、「魂の主導的部分」はたんに「ロゴス的な部分」ではないから、おそらく魂の三部分説はゼノンやクリュシッポスのものではないであろう。問題はしかし、ロゴスの整合性が、どのようにして生の整合性に反映するかという点にある。ロゴスそのものが一定の整合性、首尾一貫性をもって進行するという思想はプラトンにも見られるなじみ深い思想であるが、そのようなロゴスが、どのようにして生の整合性を実現するかは別の問題である。

⁽²²⁾Plutarchus, *De virtute morali* 3, 441C (SVF I, 202; III, 459) これらの人々 [メネデモス、アリストン、ゼノン、クリュシッポス] はみな共通して、徳はロゴスによって生みだされた、魂の主導的部分の状態ないし力であるとする。というよりむしろ徳は、調和し *ὁμολογούμενον* 確実に変わることはないロゴスそのものであるとしている。

れるとき、生はさまざまな「行為」の総体として捉えられている。さまざまな行為が全体としての生を構成する。調和にしたがって *κατὰ τὴν συμφωνίαν* 行為されるといわれるとき、前置詞 *κατὰ* は調和が持続する生にともなう持続的な状態であることを表している。すなわち、「調和にそって、調和を保ちつつ」と訳すこともできるような意味を表している。同じ文脈で用いられている *κατὰ φύσιν* あるいは *κατὰ λόγον* などの表現も、*φύσις* や *λόγος* が、生のさまざまな行為がそれにあわせてひとつの形を構成するような原理ないし規準であることを表していると考えてよいであろう。ストアイオスは次のようにいう。

幸福であることは、そのためにすべてが行われ、それ自体は何のために行われるのでもない、目的であると彼ら [ストア派] はいう。これは、徳にしたがって生きることにおいて成立し、調和しつつ *ὁμολογουμένως* 生きることにおいて、あるいは同じことであるが、自然本性にしたがって *κατὰ φύσιν* 生きることにおいて成立する。ゼノンが幸福を次のように定義した。幸福とは生の滞りなさである。

Stobaeus, *Eclogae*, 2,77,16-21 (SVF I,184; III,16).

幸福であることは目的である。目的とはそのためにすべてが行われることである。目的は「そのためにすべてが行われる」という仕方ですべての行為からひとつの全体を構成する。生がひとつの原理によって構成されるとは、生の内実をなすさまざまな行為がひとつの目的のために行為されることである。ディオゲネス・ラエルティオスにおいても、「生の滞りなさ」は、生の目的を語る文脈のなかにあった。生がさまざまな行為からなる全体であるという理解は、さまざまな行為はひとつの目的のためになされるという理解と表裏一体である。そして生の目的は、ストア派においては、自然本性と密接な観念である。ディオゲネス・ラエルティオスはいう。

徳は調和した *ὁμολογουμένην* 状態である。そしてそれだけで選ばれうるものであって、恐れや希望など外的なことのゆえに選ばれうるのではない。徳において幸福が成立する。徳は、全生涯の調和 *ὁμολογίαν* にむけて整えられた魂だからである。ロゴスの動物は逸れることがあるが、それは外的なことがらの説得力によることもあれば、付き合い合っているひとに影響されることもある。自然本性は正しい方向づけを与えているのだけれども。

Diogenes Laertius 7,89 (SVF III,39).

生の滞りなさは、生を構成するさまざまな行為の整合性であり、この意味で生の内的な整合性である。しかし、そのような内的整合性を実現する原理はたんに内的なものではない。おそらくしかし、問題は「内的」という表現で何を意味しているかにあるだろう。ストア派に即した表現を用いるなら、目的を目指すことは、生を構成する行為のひとつではない

(23)。この意味で、生の首尾一貫性を可能とする「目的」は生に内在する原理でないし、目的への方向づけを与えている自然本性も内的原理ではない。生の内的な整合性は、生にとって外的な原理によって可能となる。この意味で、「それ自身と調和した生」と「自然本性と調和した生」とは、概念的には異なるが、実質的には同じである⁽²⁴⁾。自然本性と調和することなくして、それ自身と調和した生は実現しないからである。この点にかんして、解釈上、大きな影響を与えているのは次の証言である。

それにしたがって生きなければならない自然本性に、クリュシッポスは、共通の自然本性と人間に固有な自然本性とがあると理解している。クレアンテスはしたがうべきものとして共通の自然本性だけ認め、部分ごとの自然本性は認めていない。

Diogenes Laertius 7,89 (SVF I,555; III,4).

部分ごとの自然本性を認めたのはクリュシッポスであり、クレアンテスは共通の自然本性しか認めていなかったといわれている。この証言によって、われわれはゼノンもまた共通の自然本性のみを認めていたという暗黙の理解に導かれるであろう。あるいは、自然本性についてのクレアンテスの理解はゼノンともクリュシッポスとも異なっているという印象をもつかもされない。たしかに、ストバイオスの伝えるゼウスへの頌詩のなかで、クレアンテスはゼウスを、「自然本性をつくり導く」といい、また宇宙全体がゼウスの導きにしたがうといっているから、ここにいわれる自然本性は宇宙の自然本性、あるいは宇宙そのものである。しかし同じ詩のなかで、クレアンテスは人間について、次のようにいっている。

あなたの血筋を継ぎ、生まれつき声により似ているのは、
死すべきものとして大地に生き歩くもののなかで、われらだけ⁽²⁵⁾。

Stobaeus, *Eclogae*, 1,25,7-8 (SVF I,537).

「声により似ている」は、ロゴスをもっているという点での類似を表現しているのかもしれない。

(23) 「善いもの」と「価値をもつもの」との区別に対応して語られる「選ばれうる」と「選び取られうる」の区別は、目的の選択と目的のために行われることとの選択との区別であると見ることができる。Stob. *Ecl.* 2,75,1-6 (SVF III, 131).

(24) たんなる整合性は形式的原理にすぎず、古代の倫理のなかにそのような形式主義は見いだせない、と Rist はいう。たしかに古代の倫理にそのような形式主義は見いだされないが、それは整合性がたんなる形式的原理にすぎないとは考えられていないからである。Rist, J. M. *Zeno and Stoic Consistency*, *Phronesis* 22, 1977, p.171.

(25) Stobaeus, *Ecl.* 1,25,7-8 (SVF I, 537) ἐκ σοῦ γὰρ γένος ἔσμεν, ἤχου μίμημα λαχόντες / μούνοι, ὅσα ζῶει τε καὶ ἔρπει θνήτ' ἐπὶ γαίαν' アルニムのテキストでは「彼らだけ」となっているが、その場合も「彼ら」とは「死すべきもの」である。ἤχου についてはさまざまな修正が提案されているが、Wachsmuth にしたがって読み、上記のように解釈する。さまざまな提案については、Wachsmuth, C. *Commentatio II de Zenone Citiensi et Cleanthe Assio*, Gottingae:Officina Academica Dieterichiana, 1875, p.17-18 に詳しい。

れない。いずれにせよ、ひとが万物の支配者であるゼウスと似ているということは、ひとでもまた何らかの仕方で支配者であることをいっているのだと考えられる。ガレノスは、クレアンテスの著作のなかから、激情（テュモス）と理性（ロギスモス）との対話を伝えている。これはガレノスが指摘するように、いわゆる「魂の三部分説」を前提とした記述であろう⁽²⁶⁾。クレアンテスも人間は人間に固有の支配原理を魂にもっていると考えている。ストバイオスは次のように伝えている。

すべての人間は、徳を目指すきっかけ *ἀφορμὰς* を自然本性から手に入れているのであり、クレアンテスによれば不完全な韻からなるロゴスをもっているようなものである。だから徳のない人は未完成であるが、有徳な人は完成されている。

Stobaeus, *Eclogae*, 2,65,8-11 (SVF I, 566).

ひとが徳を目指すきっかけはひとの自然本性にある。クレアンテスにとっても、自然本性は人間を人間に固有の仕方で支配するものである。この意味ではクレアンテスもまた「人間の自然本性」の固有性を認めていたというべきであろう。ディオゲネス・ラエルティオスは、目的についてのゼノンの説明は、『人間の自然本性について』と題されたゼノンの著作が典拠であると述べている。ゼノンやクレアンテスが、「人間の自然本性」「動物の自然本性」のように「……の自然本性」と語ることを斥けていたとは考えられない。自然本性はすべてのものに共通であるとしても、自然本性が促す働きは人間と人間以外の動物、植物とは異なっている。自然本性に促されて働くものを「個」と呼ぶなら、自然本性は個において働く普遍的原理、個に固有な仕方で普遍を実現する普遍的原理である。このような自然本性の理解にかんしてゼノンやクレアンテスがクリュシッポスと異なっていたことを窺わせる証言はない。クリュシッポスが共通の自然本性と部分の自然本性とを区別したというディオゲネス・ラエルティオスの証言は、クリュシッポス以前のストア派が「人間の自然本性」といった個別の自然本性を語らなかったという意味ではなく、異なった思想的背景に由来する証言であると考えべきである⁽²⁷⁾。

後記 本稿は第10回ギリシャ哲学セミナーでの発表原稿に加筆訂正したものである。発表当日の質問、意見に裨益されるところが多かった。改めて感謝する。質問は、ロゴスの整合性ないし首尾一貫性と倫理的生のとの関係、いわゆる魂の三部分説を初期ストア派が受け入れたか否か、ストバイオスの証言と『ルキアノス古注』の証言との関係、また『ルキア

⁽²⁶⁾ クレアンテスが、魂の「三部分説」を自らの思想として受け入れていたという意味ではない。

⁽²⁷⁾ 自然本性の概念がさまざまな文脈で語られることは、注22で言及したガレノスの証言にも窺うことができる。わたしがここで念頭においているのは、初期ストア派において、ある時点で、「自然本性」という概念が、「優先されるもの」「斥けられるもの」の区別を説明するためにも、用いられるようになったということである。

『ノス古注』における「自然本性的に」という表現の解釈など多岐に及んだが、本稿では本文あるいは注において、それらの指摘に応えるよう努めた。